

磐梯火山 1888 年噴火の遺構 －三ツ屋の墓石群－

千葉茂樹*

Remains at 1888 eruption of Bandai Volcano - Gravestone group at Mitsuya -

CHIBA Shigeki*

Abstract This paper describes the “Gravestone group at Mitsuya”, which is graves for victims at the 1888 eruption of Bandai Volcano. This gravestone group does not appear on any known disaster records and can be considered an important remains at the 1888 eruption of Bandai volcano.

The disaster caused at the 1888 eruption of Bandai Volcano left about 500 people dead or missing. The reason for the large number of deaths and missing was that they were caught in rock avalanche and mud flow caused by the collapse of Kobandai-san.

The Nagasaka district of this paper is located on the eastern foot of Bandai Volcano, with the Nagase River flowing on the southeast side of the district. At the 1888 eruption of Bandai volcano, debris flow flowed into the Nagase River and attacked Nagasaka. And at the southeast of Nagasaka where the debris flow had accumulated, many corpses were found. The corpses found here were temporarily buried in the debris flow field. Even after that, human bones were occasionally found, and the residents at Nagasaka built graves at a hill in Mitsuya and held memorial services.

The above is the history of why the “Gravestone group at Mitsuya” was created.

Key Words : Gravestone group at Mitsuya, Bandai volcano, 1888 eruption, Nagasaka, Mitsuya, Nagase River, disaster record, remain

はじめに

本墓石群は、磐梯火山 1888 年噴火災害における犠牲者の埋葬地すなわち遺構と考えられる。2024 年 9 月 13 日に詳細な調査を行ったので報告する。なお、本墓石群は、既知の報告書や論文等には記載がなく、初めての報告となる。

磐梯火山 1888 年噴火

同噴火について、本論との関連部分のみを簡潔に説明する。磐梯火山は、1888 年（明治 21 年）7 月 15 日、頂部北側にあった小磐梯山付近で噴火が始まり、その後、小磐梯山が崩壊し、岩屑なだれが主に山体北側に流下した。岩屑なだれは、北麓に至り溪谷の水を巻き込み泥流化した。この泥流は、東麓を流れる長瀬川に沿って南下し、川上・長坂・三ツ屋・名家まで達し、大被害をもたらした (Sekiya・Kikuchi1889 など)。特に、長坂・三ツ屋・名家付近は磐梯火山北麓から南進する長瀬川と安達太良火山西麓から西進する酸川の合流点で、平坦部がある。この平坦部で、数多くの遺体が見つかった（磐梯山噴火百周年事業実行

委員会百年史部会 1988 など）。

認知の経緯

著者は 1979 年より磐梯火山を火山地質学の観点から調査し、2001 年に磐梯火山の火山活動史を報告した（千葉・木村 2001）。それ以降は、1888 年噴火に関する記録の再検証や遺構など文化地質学的研究を行ってきた（千葉 2023 など）。

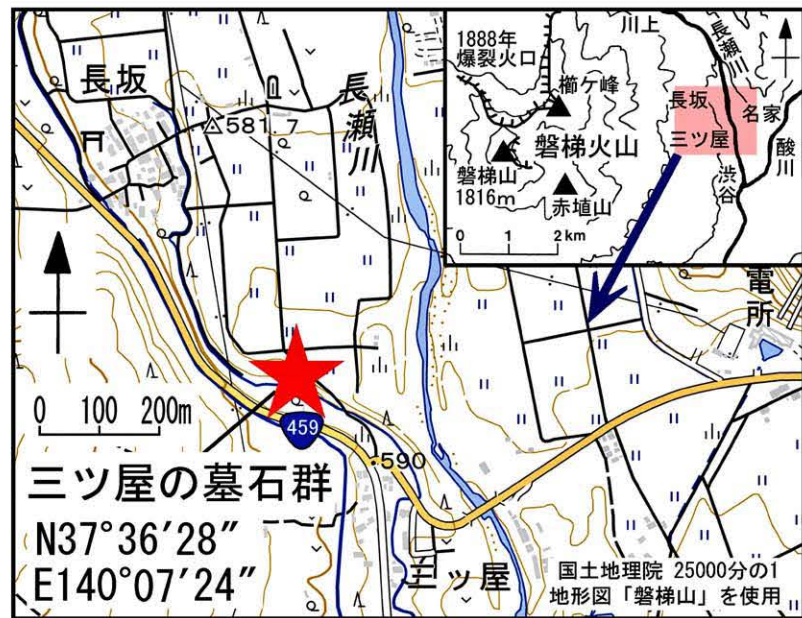
2008 年 7 月 27 日、著者は調査で長坂を訪れた。その際に出会った渡部房市氏から、三ツ屋にある本墓石群を案内され説明を受けた（第 1 図）。説明の概要は「1888 年噴火直後に、長坂南東の泥流原で見つかった遺体は一箇所に仮埋葬され（第 2 図）、後に別の場所に移された。その後も、この泥流原は土石流に繰り返し襲われた。この出来事の中で人骨が度々出た。人骨は、人間一体分ではなく、体の一部だ。その人骨を埋葬したのがこの場所だ。人骨を埋葬した後、その上に人骨と同数の石を置き、埋葬位置がわかるようにした。この墓地は長坂の住民が管理してきた。人骨が出た年月日・場所等の記録はない。」であった。彼に案内された場所は、鬱蒼とした樹林の中にある長径 10 m ほ

2024 年 12 月 12 日受付 2025 年 4 月 23 日受理 担当エディター：ト部厚志

* 福島支部。福島自然環境研究室。〒969-3141 福島県耶麻郡猪苗代町大字磐里字村東 4-3.

Fukushima Branch. Fukushima Natural Environment Laboratory. 4-3 Murahigashi, Iwasato, Inawashiro-machi, Yama-gun, Fukushima Prefecture.

E-mail:s.chiba@vesta.ocn.ne.jp



第1図 「三ツ屋の墓石群」の位置

Fig.1 Location where "Gravestone group at Mitsuya"

どの小判型の広場であった。その広場は、全域が朽ちた落葉で埋め尽くされ、その中に苔むした石が数個見えた（第3図A、渡部氏から肖像使用許可済）。このような状態のため、この広場が文化地質学的に意味のある場所なのか否か全くわからなかった。

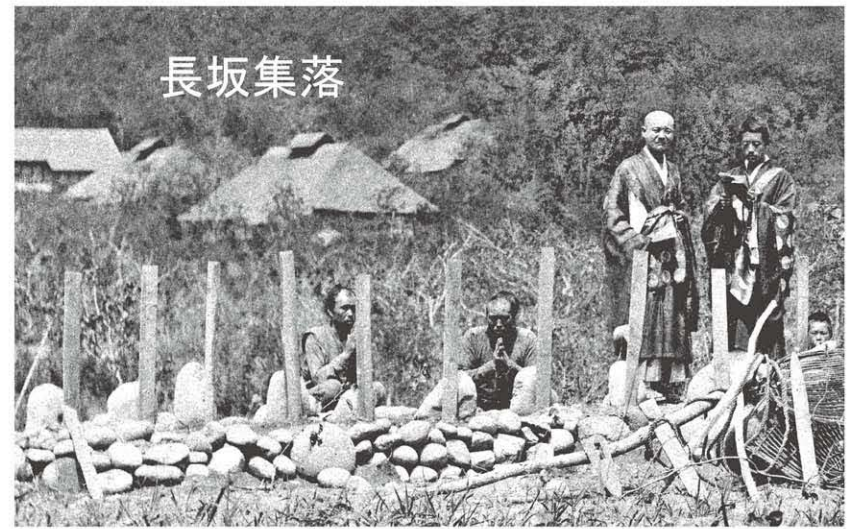
2013年10月14日、著者は調査で長坂に行った。この日も渡部氏と出会い、再び三ツ屋の墓石群の案内を受けた。広場の状態は、2008年と同様の状態であった。この日は、渡部氏の自宅に戻り、彼から1888年噴火関連の資料を見せられ説明を受けた。

2024年9月11日、著者が三ツ屋を車で通ると、上記の広場の南側一帯にあった杉林が伐採されていた。広場には陽が煌々と差込み、さらに朽ちた大量の落葉が取り除かれ、この広場の全容が明瞭となっていた（第3図B・C）。これを受け9月13日に現地調査を行った。

記 載

調査日は2024年9月13日、場所は三ツ屋集落北側にある丁字路交差点の北西約200m付近、北緯37度36分28秒・東経140度07分24秒である（第1図）。墓石群のある広場は、北西-南東に約13m・北東-南西に約7m、形状は小判型である（第4図）。広場は平坦であるが、北側へ若干傾斜している。さらに、1888年噴火の泥流原より約10m高位にある。広場の周囲は、南東側を除いて、樹高10～15mの広葉樹が取囲み、両者の境界は明瞭である。南東側の境界は、杉の伐採により不明瞭である（第3図B・C）。また、墓石群を構成する石は、竿石が1個、亜円礫が26個、亜角礫が1個である。

墓石群は4群あり、各群に符号 $a \sim \delta$ を与える（第3図D、第4図）。第4図中の矢印は、第3図の各写真の撮影方向である。 a 群（第3図E）は、北東-南西約2m・北西-南東約1.5mの四辺形内に、亜円礫が12個並ぶ。最大の石は、長径約100cm・短径約30cm・高さ約20cm（地表露出部、以下同様）である。 β 群（第3図F）は、北東-南西約1m・北西-南東約1mの範囲内に、亜円礫6個



第2図 1888年噴火災害の写真「七瀬川36在墓」の部分拡大写真の全体像は、磐梯山噴火百周年事業実行委員会百年史部会（1988）に掲載されている。

Fig.2 Partial expansion of the photograph at the 1888 eruption disaster "36 Graves on the riverbank at the Nagase River"

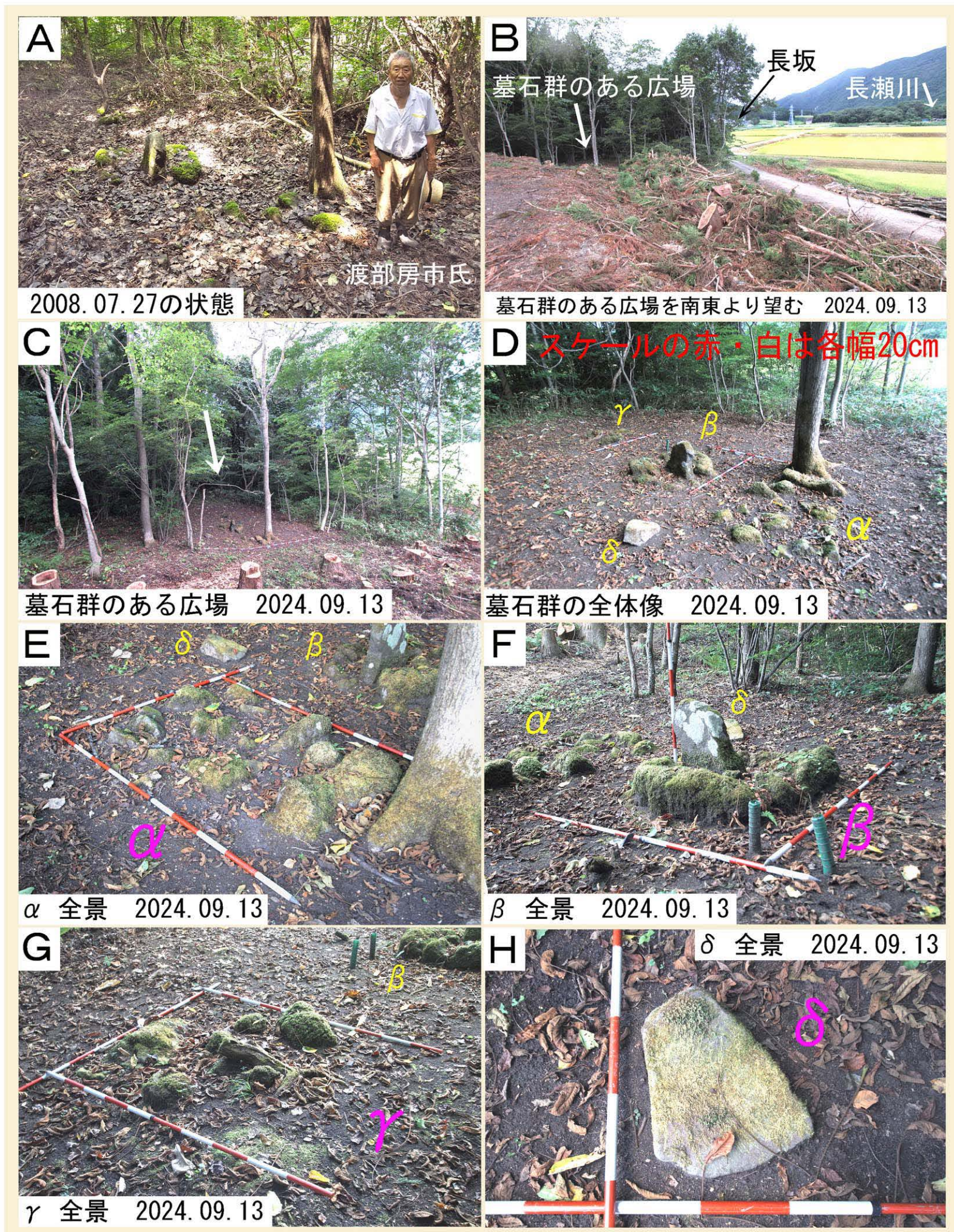
The entire photograph is published in the Centennial History Subcommittee of the Executive Committee for the Centennial Anniversary of the Mt. Bandai Eruption (1988).

が柵形状に並び、中央に竿石がある。柵形状に並ぶ亜円礫は大きなものが多く、最大の石は長径約80cm・短径約30cm・高さ約30cmである。竿石は平板状で、横幅約60cm・高さ約60cm・厚さ約15cmで、刻字はない。 γ 群（第3図G）は、北東-南西約2m・北西-南東約2mの四辺形内に、亜円礫が8個並ぶ。このうちの1個は、木材の下にある。最大の石は、長径約80cm・短径約60cm・高さ約15cmである。 δ （第3図H）は、亜角礫が1個で、大きさは長径約50cm・短径約40cm・高さ約20cmである。

考 察

磐梯火山1888年噴火に関する報告書や論文は多数ある。今回、これらの論文を調べたが、本墓石群に関する記載はなかった。以下に、磐梯火山1888年噴火災害の代表的な論文や書籍を挙げる。噴火直後の論文にSekiya・Kikuchi（1890）がある。この論文には、噴火直後の地質学的調査結果および被災状況が記載されている。更に、噴火100周年の1988年には、報告書や論文が集約・編纂され、書籍として数多く出版された（磐梯山噴火百周年事業協議会1988、磐梯山噴火百周年事業実行委員会百年史部会1988など）。北原（1998）は、噴火災害の観点から調査・記載した書籍で、長坂・三ツ屋の被災について地籍図などを用いて分析している。米地（2006）は、磐梯火山1888年噴火記録について考察した書籍である。長坂の被災状況に関して、28ページにわたり詳細な記載と考察を行っている。

次に、1888年噴火災害の死者数および発見された遺体について考える。死者数は500人程度と考えられ（米地2006）、このうち発見された遺体は81体とされる（八島1988）。したがって、残りの遺体約400体以上は岩屑なだれ堆積物や泥流堆積物の中に埋没したままである。遺体は長坂・三ツ屋・名家で数多く見つかり、その多くは頭・手足の無い遺体や首・手足など体の一部である（福島県

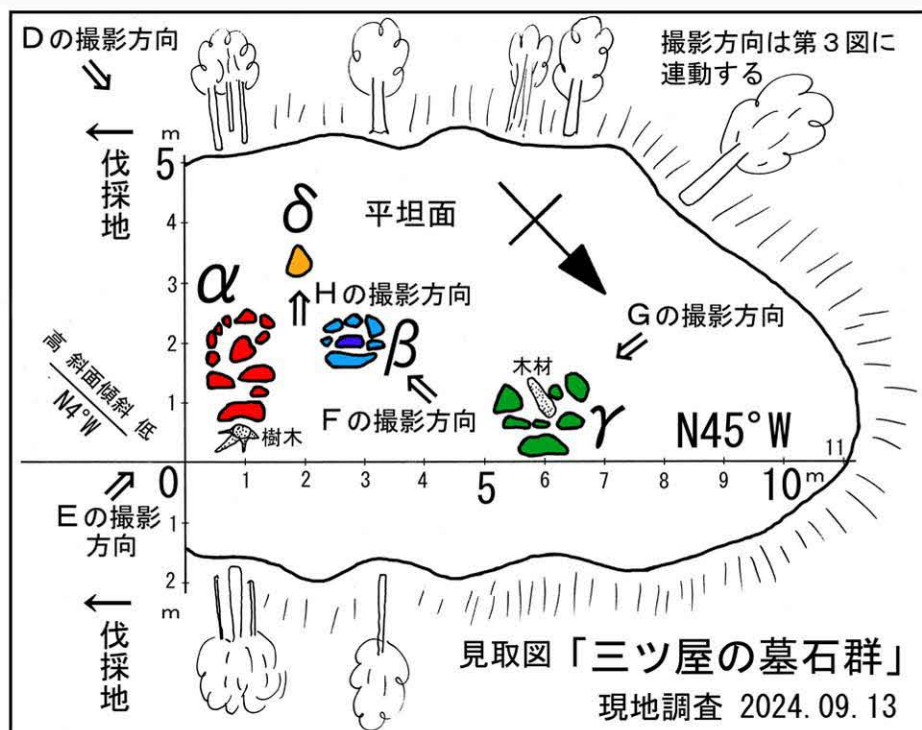


第 3 図 「三ツ屋の墓石群」の写真
Fig.3 Photographs of "Gravestone group at Mitsuya"

1888). さらに、10月19日には、三ツ屋で頭部・左手・右足のない男性の遺体が見つかった(福島県 1888)。これは、渡部房市氏の証言「人骨は、人間一体分ではなく、体の一部だ。」と一致する。また、磐梯山噴火百周年事業協議会(1988)によれば「真夏のために遺体の損傷・腐敗が激しく、発見地の近傍に仮埋葬をした。遺体は、分断・打撲・腐敗で見分けが困難な場合が多かった。更に、7月21日を以て仮埋葬の遺体を再発掘し、身元が分かれば親族に、不明の場合は町村に引き渡した。」とある。この記載に従えば、第2図の撮影日は7月21日以前となる。また、発

見された遺体の総数は、1888年8月末時点で462であり(磐梯山噴火百周年事業協議会 1988)、その後の発見(福島県 1888)や本論のように公式記録にないものもあり、確定はできない。

次に、墓石群に埋葬された人骨について考える。この地域では、1888年噴火直後の泥流以降も、大規模な土石流が長瀬川の治水が完了する1921年までに9度発生した(貞方 1979)。上記のように、遺体の多くは、1888年噴火により発生した岩屑なだれ堆積物や泥流堆積物に埋没したままとなっていた。これらの堆積物は後に発生した土石流によ



第4図 「三ツ屋の墓石群」の見取図
Fig.4 Drawing map of "Gravestone group at Mitsuya"

り削剥され、その内部に埋没していた人骨も、土石流と共に移動し長坂南東部の泥流原に露出した可能性が高い。

次に墓石群の石について考える。第2図は、長坂の南東の泥流原に作られた仮埋葬の様子である。なお、当時、長瀬川は七瀬川とも呼ばれていた（猪苗代地方史研究会1969）。注目は仮埋葬の石で、人頭大の亜円礫から円礫が積み上げられている。本墓石群 $\alpha \sim \gamma$ の石はいずれも亜円礫である（第3図D～G）。また、本墓石群がある台地には亜円礫や円礫はない。更に渡部氏の説明「人骨を埋葬した後、その上に人骨と同数の石を置いた。」がある。したがって、本墓石群 $\alpha \sim \gamma$ の亜円礫は、泥流原から人骨と一緒に運ばれ設置された可能性が高い。また、亜円礫の理由は、当時の運搬方法は人力で、泥流原から運搬する際に、丸い円礫は運びにくく、相対的に手を掛けやすい亜円礫を選んだためと推察される。さらに、墓石群 β は、中央には竿石があり、周囲を亜円礫が取り囲む（第3図F）。この状態は、第2図の竿石のある石積みと類似する。これに対し、墓石 δ は大きな亜角礫が1個である。亜角礫は墓石群がある台地に存在する。この亜円礫と亜角礫の違いは、墓石 δ の形成が、 $\alpha \sim \gamma$ とは離れた時期か違う人物により作られた可能性を示している。時間の経過による噴火災害に対する人々の意識の変化など他の条件も含めて勘案すると、墓石 δ は $\alpha \sim \gamma$ より新しい年代の可能性が高い。

以上から、本墓石群に埋葬された人骨は、磐梯山1888年噴火の泥流に飲み込まれた犠牲者の可能性が高い。更に、渡部氏の証言・墓石群が4群であること・各墓石群の形状や構成礫の特徴から、墓石群 $\alpha \sim \gamma$ はこの地を襲った9度の土石流の後など特定の時期に発見された人骨をまとめて埋葬した可能性が高い。また、墓石 δ は $\alpha \sim \gamma$ より後の時期と考えられる。

最後に

磐梯山1888年噴火報告の多くは、噴火直後に外部から調査に訪れた研究者やジャーナリストのもので（Sekiya・Kikuchi 1890 など）、噴火直後のものが大半あり、その後の状況を伝える報告は少ない。さらに、著者が地元以外のため、現地を熟知しておらず錯誤や誤記などが見られる（千葉2008 など）。また、公的機関の記録も、災害直後の混乱で、誤記や重複記載が認められる（磐梯山噴火百周年事業協議会1988）。

その観点から、本論の「三ツ屋の墓石群」は、1888年噴火から若干の時間を経て作られたものであり、既知の報告から漏れたと考えられる。また、北原（1998）および米地（2006）も、著者が地元でないため本墓石群を見落としたと考えられる。今回、地元長坂の渡部房市氏の「自分が持っている1888年噴火の情報を後世に残したい」という執念が本論に至った。渡部氏は満99歳とご高齢で、彼の存命中に本論を完成できたことは幸いである。

謝辞 本論作成に当たり、渡部房市氏、歴史春秋社様にはご協力をいただいた。また、宮城県登米市の佐沼古文書の会顧問の佐藤清一氏には古文書の解読をしていただいた。更に、竹本弘幸氏には現地調査でご協力をいただき、匿名の査読氏には本論の完成にご助言をいただいた。この他多くの方にご協力いただいた。皆様に御礼申し上げます。

文献

- 磐梯山噴火百周年事業実行委員会百年史部会（1988）記録写真集磐梯山破裂セリ。歴史春秋社, 311p.
- 磐梯山噴火百周年事業協議会（1988）磐梯山噴火百周年記念誌。ぎょうせい, 182 + 56p.
- 千葉茂樹（2008）学習院大学所蔵、磐梯火山1888年噴火の写真。地球科学, 62: 331-336.
- 千葉茂樹（2023）1888年磐梯山噴火災害からの復興の遺構—磐梯山北麓に存在した石碑「明治神宮」—. 地球科学, 77: 45-52.
- 千葉茂樹・木村純一（2001）磐梯火山の地質と火山活動史—火山灰編年法を用いた火山活動の解析—. 岩石鉱物科学, 30: 126-156.
- 福島県（1888）明治21年自7月15日至10月8日 磐梯山事変取扱事務紀事 福島県調査, 39p.
- 猪苗代地方史研究会（1969）長瀬川。猪苗代地方史研究会, 42p.
- 北原糸子（1998）磐梯火山噴火。災異から災害の科学へ。吉川弘文館, 270 + 14p.
- 貞方 昇（1979）裏磐梯土石流による長瀬川沖積地の地形変化。地理科学, 31: 1-9.
- Sekiya, S. and Kikuchi, Y. (1890) The eruption of Bandai-san. Jour.Coll.Sci.Imp. Univ.Japan, 3: 91-172.
- 八島隆一（1988）磐梯山の大噴火。磐梯火山と湖の生いたち。文化書房博文社, 15-31.
- 米地文夫（2006）磐梯山爆発。古今書院, 201p.